あと 12

2009

中野・哲学堂

生而不有　　保多孝三著『柞廬印存』(一) より

老子に

「萬物作焉而不辭、生而不有、」

(道は万物を生み出しても、一言も語らず、生み出したものを、わがものとはしない。)

「生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰。」

(ものを生み出し育てながら自分の物とせず、何かを成し遂げてもそれに頼らず、人の上に立っても取り仕切ったりしない。)

これを玄徳といふらしい。小さく印刷した作品は昭和二八年毎日展出展。両作ともおおらかに刻されてゐるが、どちらかといへば『柞廬印存』のほうがその色が強い。選ばれ、刻られた語句の意を思ひつ、印影をながめることは愉しい時間である。(喜孝)

あと

十　二　月

十一月

人影の見あたらねども落葉焚
聲ながくあげてヤマナシ谷へ落つ
落しもの鴉がとりに秋の道
焼肉で十一月を泣いてゐる
そばの花畫をまはると見えてくる

本町三　佐藤喜孝

鰯雲お待ちなさいね猫の餌
柿紅葉怒るとこわい猫もどる
養父母の話きく猫柿紅葉
しづしづと萩のトンネル花の声
口喧嘩帰る家ある九月尽

聖蹟桜ケ丘　安部里子

文化の日

文化の日考へる人手は顎に
カタカナが万事に多し文化の日
文化の日海軍カレー所望せり
文化の日梅のおにぎり買ひにけり
カタカナのあっけらかんと文化の日

曳舟　遠藤　実

コスモスを起す嵐のあけの朝
秋さぶの駅のベンチでパン齧る
天高し集ひしはみな独りもの
サッカーの喚声の空赤トンボ
穂芒に日のあつまりて静かなり

逗子　鎌倉喜久恵

投げ入れて向き様様の花芒
千歳飴五歳にきざす男前
ぎんなんをいただいてくる髪の留守
蛸凧のやうに干されて秋日和
流れ星今どのあたり宇宙船

川崎・小田栄　木村茂登子

ぱらぱらとぱらぱらと降る椎拾ひ
やはらかき香の残りけり秋の人
一角に電飾の如金木犀
限りなく落羽松伸ぶ秋の空
朗々とふるさと歌ふ秋麗

白金　斉藤裕子

林試の森公園

飯桐の房の実鴉は高く鳴く
野良猫にをぢさん抱かれ昼の虫
一心に木蔦絡めりすがれ虫
秋遍路めき木々巡る風の中
沼杉の実を付けてなほ芳しき

京橋　篠田純子

新聞を開く無花果ひとつ食べ
新米やためつすがめつ水加減
猫が猫見張る鰯の干されをり
すれ違ふ人や落葉の風を連れ
小春日や羽根なき我は杖を持ち

千駄木　芝尚子

秋の空木立に懸かる赤風船
言の葉を紡ぐわらべに秋日和
山茶花のほころびかけをいとほしむ
月見団子母の指先なつかしく
冠雪便り一人暮しの姉思ふ

宝仙寺前　芝宮須磨子

鉦　叩

ほかのこと考えてゐる花野かな
燈台が見える畠の八つ頭
天守閣三日月悪をそそのかす
簡にして要の打ちやう鉦叩
母のがり曼珠沙華咲く行き難し

剱地東出（つるぎちひがしで）　定梶じよう

北海道

故郷の山は豊かに茸狩
噴煙を上げて十勝岳の裾紅葉
あつあつのコロッケ食す美瑛は秋
級友の変はらぬ笑顔九月尽
天高し北海道のクラス会

所沢　須賀敏子

落ち葉踏む足音風に吸はれゆく
故郷は何もなけれど墓参
無花果の落ちて形を無くしけり
穐田に海からの風里の風
何処ともなく豆幹を焚く音のせり

本町三丁目　鈴木多枝子

ちりとりに金木犀を掃き寄せし
硝子戸にかかりて落ちるいぼむしり
取り扱ひ説明書読み夜の長き
香草を取らむするや螇蚸とぶ
彼岸花折り取りし手を洗ひけり

浦和　竹内弘子

温め酒

誘ふには人の老いたり十三夜
独り居のやや内証めく温め酒
呼び止めて多羅葉の実を指し示す
猿のこぬ猿の腰掛秋うらら
秋風や樹ごと樹ごとの幹の肌
秋のセル（前号正誤）しきりに母の恋しき日

田端　田中藤穂

運動会

白金台森の一隅柿赤し
無患子の木の下未就園児席
運動会転んで起きて大拍手
黄落や大樹ぐるりのリレーかな
がんばれの嗚咽となりし運動会

三光坂　東亜未

水澄む

水澄みて伊勢神宮に人多し
水澄みて群れる尾鰭のゆらゆらと
枝枝の水面に延びて水澄めり
土手をみな奉仕の花壇水澄めり
コンクリートで固める小川水澄めり

富田　長崎桂子

秋

金星に月の近づく秋一夜
満月が雨戸閉ぢるをこばみをり
一言がつれなくひびき秋深む
小説を読みたくなりし秋の雨
刈田道白鷺やはり一羽なり

大宮　早崎泰江

みかん山生り年が呼ぶ働き手
みかん畑継ぐ農大出陽ざし濃し
カーセールス蜜柑生り年畑に来る
ぢぢ植ゑを農協指導みかん畑
青みかん手つかずあの日見合の日

町屋　藤野寿子

秋　風

石畳ふむも供養や秋の水
秋風や地を這ふもののやはらかし
つつがなく各駅停車草の花
秋の蚊を追ふこともなく是非もなく
いちろうやはにしみとほる秋の酒

河田町　堀内一郎

秋暑し宇宙のオーラ持還る
木犀の香りたしかに隣より
秋晴や白球追ひし日もありぬ
賜りし松茸の香はカナダ産
貴船菊ゆらし野良猫睨み合ふ

中井　森山のりこ

郁子

手みやげに庭の郁子剪り絵手紙展
ましら酒一瞬奈落へ竦む夢
留守居番地下鉄響く秋日中
木漏れ日に稚児百合の実の一つづつ
紅大根おもむろに土洗ひけり

落合　森　理和

露草のきらと瑠璃色露葎
朝の風囁き交す猫じゃらし
無月にも手作り団子盛られをり
梨売のぽつりと立ちし日の昏れる
置き去りのパンク自転車秋深む

東大宮　山荘慶子

山茶花の枝混み合ひてふくらめり
並べては数へては子の木の実かな
バーベキューの子らに落葉の降りやまず
利根林檎ドサリと届く朝の便
言ひ返ししてゐる子供秋の薔薇

本町三　吉成美代子

雨あがるそろりぞろりと落葉かな
風さやか鳥の番の羽繕ひ
シマサルスベリ三ツ股四ツ股わかれ立つ
柵を抜け出で蓼の茎のいろ
上むいて下むいて落つ枯葉かな

鍋屋横丁　吉弘恭子

母

秋風や石の肌より母の声
法師蟬妻に黒髪なくなれり
音立てて幻の世へ木の実落つ
母の忌や捨印のごと月のぼる
母が欲る駄菓子見つけぬ秋深む

西浦和　渡邉友七

林檎園

赤城山麓〝シャローム〟という林檎園
挽立ての林檎硬さを競合ふ
王林陽光北斗花咲ジョナゴールド
酸味ある林檎の銘は新世界
頂きし数多の林檎嘴の跡

清瀬　赤座典子

一人一句

ゲヂゲヂがゲヂゲヂとゐる秋深み　佐藤喜孝

萩揺れる坂は変らぬ麻布かな　赤座典子

秋暑しラベルのボレロ点滴に　安部里子

秋の海なぜか心を静かにす　遠藤実

鮎食うべ指の香れり川の音　鎌倉喜久恵

ひらかなでさらにやさしく秋の草　木村茂登子

白木槿きちんとたたみ散りにけり　篠田純子

丁寧な間違ひ電話夜の秋　芝尚子

言葉なく行き交ふ秋の地下ホーム　芝宮須磨子

踊り唄石屋にとどきもう寝しや　定梶じょう

虫の声近くに聞いて髪染める　須賀敏子

薄薄と黄の兆しをる青蜜柑　鈴木多枝子

前月作品

黒眼がちなりし飼犬十三夜　竹内弘子

わが影の老人歩き秋日傘　田中藤穂

三井寺やシテの今日の日秋気満つ　東亜未

交通整理の紅白の旗櫨紅葉　長崎桂子

小学校フェンスが稲架となりにけり　早崎泰江

都電待つ列さんざめき敬老日　藤野寿子

秩父路や邯鄲の声逃すまじ　森山のりこ

柔肌の河馬の口中天高し　森理和

朝顔の涌きでるやうに咲きのぼる　山荘慶子

秋の空ビルは高さを競ひをり　吉成美代子

遺言書書けば書いたで白露かな　吉弘恭子

規則正しく蝉鳴いてをりビルはざま　鈴木多枝子

喜孝　抄

十一月作品より

王岩・佐藤喜孝

をぢさん逝く

重きもの思ひ出柩秋の雨　佐藤喜孝

作者のおじさんは天寿を全うして逝かれた。その霊柩を前にして、作者は様々の事を思い出したのであろう。折悪しく寂しげに降り出した秋雨は肉親を失った人の気持ちを一層重くした。上五の「重きもの」に凝縮された作者の心情は計り知れないものである。

遠き日の月を重ねてけふの月　芝尚子

また八月十五夜になった。名月は相変わらず美しく明るく照らしている。今仰向けて月を見上げれば、遥かに過ごしてきた歳月を思い出す。ああ、そうだ。唐に渡った阿倍仲麻呂も長安で月見をし、故郷の日本へ思いを馳せて、「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」と詠んでいた。同じ月を今私も見上げている。

唐の詩人張若虚は「春江花月夜」という長詩の中で、

江畔何人初見月、
江月何年初照人。
人生代代無窮已、
江月年年望相似。

江畔　何れの人か　初めて月を見
江月　何れの年か　初めて人を照らしし
人生　代代　窮りて已むこと無く
江月　年年　相似るを望む

と詠んでいた。

半日を漁網繕ふ秋うらら　長崎桂子

漁村の風景。秋麗かな陽射しを受けながら

漁網を修理した半日。それとなく潮騒が聞こえて、海の匂いが漂ってきたようである。

遺言書けば書いたで白露かな　　吉弘　恭子

白露は美しくて儚いものの象徴である。曹操は「短歌行」の中で人生を朝露に譬えて次のように歌った。

対酒当歌、　酒に対しては当に歌ふべし
人生幾何。　人生幾何ぞ
譬如朝露、　譬ば朝露の如し
去日苦多。　去りし日は苦だ多く
慨当以慷、　慨して当に以て慷すべし
憂思難忘。　憂思忘れ難し
何以解憂、　何を以てか憂ひを解かん
唯有杜康。　ただ杜康有るのみ

遺言と白露との取り合わせによる句も意味深長である。

秋の夜夫の愛せし伝記読む　　森山のりこ

秋の長い夜に昔夫の愛読した伝記を取り出して読みはじめた。一体どんな伝記であろうか。偉人の伝記であろう。きっと夫の尊敬した偉人の人生を綴った伝記であろう。

枕木にやすむ秋蝶陽に染むる　　鎌倉喜久恵

夕日を背に受けながら枕木に止まって休んでいる秋蝶の無心。枕木だから、列車のレールを連想させる。やがて列車は近づき、秋蝶の暫しの夢を破るであろう。　（以上　王岩）

虫の声近くに聞いて髪染める　　須賀敏子

髪は若人も染めるが、ここは白髪染めであろう。この句は髪を染める傍らで虫の声がしてゐるとしか書かなかった。そのことにより場の場景、心の有様が伝わってくるしみじみとした佳句を得た。　（以上　喜孝）

近世俳諧と漢詩文 2 弐拾六

王　岩

歳　暮

家に四の壁はなけれどとしぞ守　　翠　実

翠実、生没年未詳。江森月居の門人である。この句は武然編『明和九年春慶引』に見える。この句は『唐詩選』に載る呉象之の「少年行」の結句を翻案した部に、下五「としぞ守」を配したものである。

承恩借猟小平津　　恩を承けて借猟す　小平津
使気常遊中貴人　　気を使うて常に遊ぶ　中貴人
一擲千金渾是膽　　一擲千金　渾べて是れ胆
家無四壁不知貧　　家に四壁無きも　貧を知らず

漢詩の起承句は、長安の享楽的な若者が宮中顕貴の恩恵をうけて、意気に任せて義侠に振舞っているさまを詠った。小平津は天子の御猟場があった場所だという。転結句は花柳街などへ入って一度の豪遊に千金を擲って少しも惜しまず、家には四方の壁さえなくても、貧乏など意識もせずに全然苦にしない若者の豪気なさまを詠った。

翠実は呉象之が古楽府題の「少年行」で描かれた少年の豪気さを気取って、「歳暮」の風景を詠んでいる。家に四方の壁もないほど貧乏だけど、無事に新年を迎えることができて目出度く幸せである。「としぞ守」、年守る。除夜に眠らず、夜明しして元旦を迎えること。

「家に四の壁はなけれど」という漢詩の翻案と「としぞ守」という季語との取り合わせは、格調の高さを醸している。

あをかき集

堀内一郎選

（六人目以降五十音順）

入れかはりたちかはりして秋の蝶　早崎　泰江

耳なれぬ小鳥来てゐる目覚めかな

秋高し色づきを待ち木々寂か

野兎と聞きて芒野分け入りぬ

今日も又冬瓜眺め終るなり

秋の空母は硝子の目となりぬ　篠田　純子

露けしや膝にこぼせるこなぐすり

川添ひの落人村の柿襖

洋梨にヴィーナスの線ありにけり

秋風の吹き抜けてゆく身柱元（ちりげもと）　鈴木多枝子

抱きあげて父似母似と天高し

群れゐても一花は孤高曼珠沙華

頑張って登る石段秋の寺

父の忌に合せ栗剥く娘のをりぬ

呟きは風との会話秋惜しむ

シャボン玉童子童話の中にゐる　渡邊　友七

高窓の風秋めくや受診待つ

沼恋ふて沼に果てゆく傷の蝶

闘病の秋の水呑む咽喉仏

旅果つや風の音より末枯るる

シルバーと園児とソーラン運動会　藤野　寿子

台風禍停電烏舞ひ遊ぶ

紅葉坂お達者クラブ口達者

柿をむく板前大志ひそめたる

住み慣れて浪曲落語小鳥来る

瓢持つ羅漢も在はす草紅葉　森山のりこ

箱根路の空中散歩秋の富士

思ひ出も益々遠くあきざくら　森　理和
秋空に江戸の名残りの鐘響く
倒木にクリタケ森の音符かな
虫ピンの細さの茸樵平
深呼吸樵の実旨し我は猿
秋の日に白黄揚羽蝶揃ふ
認知症の人に手ひかれ秋の夜　吉成美代子
児に隠れ子を叱りをる秋の薔薇
晩秋の鴉を意識して通る
秋のバスマスクの顔の数多ある
ひとり居の仮庵に飛蝗と猿酒　吉弘　恭子
朝露を踏みて三泊り仮の宿
仮縫の躾つけ替ふ七五三
仮免やモーターショーの冷たき肌
何処行くの遠くから声秋晴るる　赤座　典子
ひっそりと紅と化す種茘枝かな
紀ノ川と懐かしき名の黒茶柿
池の鴨お散歩日和草紅葉

いのこずち人さらひ来ると母の声　遠藤　実
夜長かな広げたままの旅の地図
大嘆三十階に風邪の人
村の名に字がつづきて小春かな
とれたての秋刀魚するどく九寸五分　鎌倉喜久恵
耳鳴りと紛ふて目覚む茶立虫
渋滞は紅葉の中いろは坂
いが栗を叩き落して且つ踏んで
漢字では書かぬときめしをみなへし　木村茂登子
十三夜うたひし人を思ひ出す
酉の市値切った分をご祝儀に
霜の朝烏泣くよに鳴いてをり
立てられてけふより案山子ひとりぼち　定梶じょう
鯖雲や疎開といふがありし頃
星月夜笙ひちりきを聞くごとし
日々あふぐ糸瓜は少し離れて見る
ビルの窓張りついてゐし鰯雲　芝　尚子
つくばひに水なみなみと小鳥来る

落葉掻く音も機嫌のわるさうな
落葉踏む雨後の一歩の重きこと
秋晴や鍋屋横丁二往復　芝宮須磨子
作品展老どち集ふ秋の昼
友逝きて白粉花の赤白黄
秋時雨語り尽せぬふるさとを
山深き温泉宿の蔦紅葉　須賀　敏子
道端の手押しポンプや石蕗の花
橡の実を拾って栗鼠へ土産とす
菊膾秋田の酒と並べたり
もう遭へぬ人一人増え神無月　田中　藤穂
てつちりや言ひたいことを言ふ人と
暗がりに集まつてをり哀れ蚊は
骨壺へ細き骨入れ石蕗の花
繕ひの手間取釣瓶落しかな　東　亜　未
天高し鶴亀の舞師の米寿
名にし負ふ美男葛の真赤赤
擦れ違ひああの一声十三夜
白砂青松故郷排気ガスに秋思　長崎　桂子
秋扇食育講座のあちこちに
清しさの日毎増したり障子貼る
鶏頭や風の清しさ紅褪せる

一句燦々

入れかはり立ちかはりして秋の蝶　**泰江**

世の移り変わりは目覚ましい。激動の一年、大いなるリズムに左右されながら年を迎える。秋の蝶は人間の行方でもある。すぐに鬼城の「生きかはり死にかはりして打つ田かな」を思い起こした。名吟を踏まえての佳品と思う。

秋の空母は硝子の目となりぬ　**純子**

「硝子の目」から透明感に突き当る。爽秋の母の清々しさならば良いのだが、ただならぬものに聞こえてくる。この秋の空にはいささか淋しさが滲むようだ。

抱きあげて父似母似と天高し　　多枝子

何処か広々とした景の中での平和な一家族の集いであろう。皆誰かに似ているのが幸福感の可笑しさである。今朝テレビに服部克久氏が出て、昔、若松町に居て注文を取りに行った頃の一青年が親父、服部良一氏に、そっくりになって来たのには驚いた。

シャボン玉童子童話の中にぬる　　友七

シャボン玉の虹色淡い夢の世界に引き入れる。童子の眼差しも、うっとり童話にはまっているのである。作者も一つ時心の静もりを得たようだ。「高窓の風秋めくや受診待つ」「闘病の秋の水呑む咽喉仏」もあるので病室の景かも。「ぬまにはてゆく」に回帰現象を思う。

シルバーと園児とソーラン運動会　　寿子

小学校・幼稚園で運動会に招待されて行くとソーラン節による体操が始まる。敬老席もあるので、打ってつけ、和やかな中に孫の成長に目を細めていた。「お達者クラブ」身体は利かぬが、言いたいことを言って愚かに。

瓢持つ羅漢も在はす草紅葉　　のりこ

川越の五百羅漢を感じた。種々の石像が旅人を楽しませてくれる。その姿は人事百般に通じる諧謔の所作は平穏への祈りである。

倒木にクリタケ森の音符かな　　理和

殺風景の中で、せめてもの感激のプレゼント、優しいお方である。聞こえぬ音楽が、物を言う。楽しむより楽しませる作者。

認知症の人に手ひかれ秋の夜　　美代子

昔はこのやうな人を隔離状態にしたが、いまはまわりも助け合って見守る雰囲気が出来てきた。心の交流を描いている。

ひとり居の仮庵に飛蝗と猿酒　　恭子

ひとり居の味気なさの強調なのか、飛蝗猿酒の奇異さ加減は尋常ではない。いろいろやられる方だから、好奇心が傾くのであろう。「仮免やモーターショーの冷たき肌」も佳品と思う。安堵の裏の冷感。

何処行くの遠くからの声秋晴るる　　典子

ふれあいの良さを物語る。仲良しグループなんであろう。兄弟姉妹でも疎遠のこの頃、遠い身内より近くの友人という如し、茘枝、黒柿、目立つが孤立の感。

いのこずち人さらい来ると母の声　　実

子供の頃、暗くなるまで遊んでいると母親に言われたものだ。曲馬団やサーカスに売られるとか脅かされた。今で言う拉致である。子を思う母の情なのだが。

とれたての秋刀魚するどく九寸五分　　喜久恵

いかにも新鮮であり小気味良い。九寸五分と畳んだが全く策意が感じられないのは真面目さ懸命さ。

漢字では書かぬときめしをみなへし　　茂登子

女郎花では遊女を思わせるので嫌うのであろう。プライドが許さないのである。男性にしても嫌悪感はある。花に恨みはないが。

立てられてけふより案山子ひとりぼち　　じょう

車窓から次々見える案山子は種々の趣向で旅人を楽しませてくれる。反面作者の優しさが孤立感を捉えた。芭蕉の「面白うてやがて悲しき」が浮ぶ。滑稽と寂寥と。

ビルの窓張り付いてゐし鰯雲　　尚子

一般の家では、この景は見られぬが、ビルが増え町に新たな現象が生れる。日々の発見が作者にエネルギーを与える。

秋晴や鍋屋横丁二往復　　須磨子

鍋屋横丁は昔、鍋釜百姓道具等を商っていたところであろう。何故か人混み賑わいを感じ楽しい。戦後、しばらくは往来したものだ。ドライクリーニング工場があって持ち運んだものである。今はどうなったか。作者の処から遠くはあるまいが二往復は大変、でも健康なのである。近況を知らせる挨拶句としても絶品と思う。

山深き温泉宿の蔦紅葉　　敏子

町のしがらみから開放されたい思いは誰にも、あちこちへ行った思い出が甦える。又行って見たい気にさせる。蔦紅葉の赤さも泣かせる。過ぎし日の秘境の紅葉鮮らしく。

もう遭へぬ人一人増え神無月　　藤穂

十一月も半ばを過ぎると訃報欠礼はがきが送られてくる。友人からも親戚からも。自身が取り残された感じになる。先日「獐」十月号をしばらくぶりに手にした、高島征夫追悼特集とある。「獐」は喜孝さんによって編集され私も参加していたが、その後は征夫氏の運営であったらしい。

吉川葭夫氏の追悼文で内情を知り残念なことである。この号で終りとある。謹んでお悔み申し上げる。享年六十五歳は惜しまれてならない。

繕ひの手間取釣瓶落しかな　　東亜未

針先も暗くなり灯を入れねばならない。母の針仕事を思い出す。勿体無い精神、健在は嬉しい。今の人はすぐ捨ててしまうし又、ボロを平気で着ているが。

白砂青松の故郷排気ガスに秋思　　桂子

絶景が汚されてゆく、近代化が許せないのである。道路・ダム・基地の問題等、何もなかった日。

銀雪・猫もの がたり

篠田純子

彼の生い立ちは、どの様かは知り得ない。銀座三丁目、昔の木挽町に「銚子屋」という肉屋がある。その傍の「遼子」という小さなクラブの横にいつも居る、汚れた毛並の雄猫を、私は気になっていた。

彼の名が「お父さん」であり、野良猫であることを最近知った。それから私は、彼を見掛ける度に、「お父さん！」と、親近感をこめて声をかける、というのも、一寸色あせた毛艶。肩の落ち具合。まさにうちの主人と相似たり……。という感じだったので。

彼は遼子さん（「遼子」というクラブのママ）から、決ってキャットフードの缶詰と、カニカマボコを、餌として当てがわれている。が、どうも喜んで食べているようではない。（ここのところも、うちの主人に似ている。）

さて、「お父さん」が、食事に口をつけ始めると、近所の猫たちがやってきて横から割込んで食べ始める。そのうち、電柱の上で、先刻から一部始終を見ていた烏が、猫たちが引けた後、降りて来てついばむ。

暑いある日、「お父さん」の様子が変なので、

近くの猫好きの焼鳥屋のおじさんに聞いてみた。

「この猫、夏やせですか？」

「猫いらずを食ったネズミを捕って食ったらしいんだ。毒が回って、大変だったんだ。あれから一週間たつけどね。もう、死んじゃうんだと思ったよ。

家に帰り、私は娘に以上の事を語り、二人で次のように洞察した。

「お父さん」は今まで一度もネズミを取った事がない。しかし近所には、ネズミ取りの名人と言われる三毛猫一族がいる。彼女らは、毎夜のようにネズミを取っては、空中にほうり一投げ、得意げに遊んでいるらしい（三毛猫一族の飼い主の談）。

その猫達に対抗し、いつか「お父さん」も一度、ネズミを捕ってやろう。ぜったい捕るんだ…。

と、心秘かに思っていた。そして、ある晩、ネズミがヨロヨロと目の前に現れた。これは一世一代、ネズミを捕るチャンス到来。とばかりにかぶりついた。どうだ。「お父さん」の力を見たか。とばかりに意気揚々だ。

ところが、毒がまわりはじめた。

夏痩せと他人に聞かれてほろりと涙
毒ネズミ食ったと言へもせず（都々逸）

この「お父さん」という猫に、今まで幸せな事があったのだろうか（例えば、大恋愛をしたとか……）。これから彼にとって良い事が訪れるであろうか？（例えば、猫の町内会長になるとか……）。

彼に幸多かれと、私達母娘は祈らずにはいられなかった。

あを柳集

兼題　板

佐藤喜孝　選

回覧板まはつて戻る白露かな

回覧板は今でも我が家には回ってきたり回したりしてゐる。さういへば情報の発信元は何処なのか訊いたことがない。〝白露かな〟で隣近所との交流の様がうかがへる。なつかしいものを再確認した一句。

さやけしや能楽堂の板に立つ

私には思ひも及ばぬ場所である。原句は〝佇つ〟。佇はたたずむ意、タツと読むにはまだ抵抗が残る。近年多く俳句に使はれてゐるのを目にする。

尼寺の庫裏の上げ板藷を秘む

私も上げ板を詠んだが、今は我が家には床下収納庫と称して残ってゐる。尼寺の床下に藷が保存されてゐるのを見つけた作者はそのことをおもしろをかしく詠まれた。

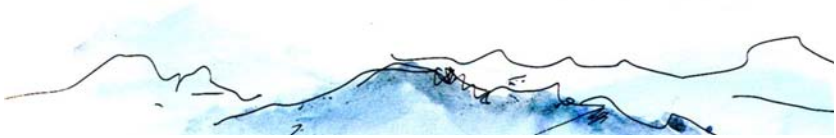
裁ち板に篦あと無数鳥渡る

秋燈母の裁ち板篦の跡

裁ち板の篦のいく筋夕日なか

裁ち板は居間に座卓と長き夜

裁ち板の句が四句あった。季語の斡旋が見どころ。上手すぎても当たり前でも難しい。季語がないのは尚更と思った。



秋燈母の裁ち板篦の跡　森　理和

秋闌板の間狭しと新聞店　藤野寿子

つるべおとし工事現場は板囲ひ

神楽坂黒板塀も冬に入る　田中藤穂

石を置く板屋根秋の黄砂降る

五百重(いほへ)波膝がわらひし歩み板　吉弘恭子

回覧板まはつて戻る白露かな

姫椿柄振板からはみ出でて

新走り板谷波山のうすきいろ

板の間に見知らぬ猫と枯葉かな

花野道寺の板戸の落書を　長崎桂子

さやけしや能楽堂の板に立つ

白足袋の板に吸ひ付けられしかな　東亜未

尼寺の庫裏の上げ板諸を秘む　定梶じょう

漬け菜樽月夜は板に還るべう

春の灯をともす天井板目あり　竹内弘子

冬近し黒板は濃きみどりいろ

秋の田や立看板の取り払はれ

板塀を猫の擦りゆく十三夜

裁ち板に箆あと無数鳥渡る　木村茂登子

秋冷を素足に板の間の廚

どぶ板の腐ったところ鰯雲　篠田純子

横須賀のどぶ板通りハローウイン

嫁入りの柾のまな板十三夜

唐黍に板歯（ぬかば）をつかふ翁かな　佐藤喜孝

子規庵の天上板に冬日差

柿の空背をもたせたる板襖

手と板でつなぐ小舟と春の草

板塀に他人の布團の花模様

上げ板に指入れて曲ぐ霧深め

上げ板のカタと鳴ったる二日かな

黒板の長き受け皿夏休

少年に展翅板あり長き夏

秋思ありゴリラの厚き胸板に

（投句数　四八句）

身柱元（ちりけもと）之巻　両吟歌仙

メールにて

秋風の吹き抜けてゆく身柱元（ちりけもと）　不寝
　山の湯宿は木の葉のしぐれ　竹洗
幾度も月浮かぶ盃飲み干して　寝
　仄聞にして俳誌廃刊　洗
十年はひと昔とや鷭を焼く　寝
　鱗となりし壁の青蔦　洗
願はくば雲に乗りゐて生ビール　寝
　昇る地球は抓めさうなり　洗
狩衣に白湯を所望と訪はれ　寝
　小枝に結ぶみずくきのあと　洗
松といふ文字は変れど待つ今宵　寝
　冨士にむかひて延びる高速　洗
湖に氷張りゐる舟溜り　寝
　動けるものは冬の月のみ　洗
伯林の崩れた壁のむかう側　寝
　ひしと抱きあひ涙なみだす　洗
生きて見る嗚呼此の花の香の甘く　寝
　春宵一刻止り木にゐる　洗

南国の文彩の鳥わすれ霜　洗
　瞼の裏にありて七色　寝
この辺り天女あそべるとぞ聞いて　洗
　背伸びしている浦島太郎　寝
籠枕けふも汽笛が遠ざかる　洗
　四股名入りたる浴衣褪せたり　寝
人妻に横恋慕してしまひたる　洗
　胸しくしくと膏薬を貼る　寝
逸りける物見遊山の友のこゑ　洗
　若き雌馬に乗り替へてゐる　寝
草原に大の字に臥す昼の月　洗
　どんぐり並べ足し算引き算　寝
残る蚊にバッタバッタと仕分人　洗
　ノーベル受賞者頭抱へる　寝
八つぁんが隠居に問へる空の果　洗
　お天道様は付いてまはらぁ　寝
青い小屋上野の山は花盛り　洗
　襟ゆったりと晩春の人　不

十月の句会

傳　中野区　カフェ傳

冬近し黒板は濃きみどりいろ　弘子
何処行くの遠くから声秋晴るる　典子
そばの花昼をまはると見えてくる　喜孝
悲喜の悲の多き現世虫の闇　寒林
耳なれぬ小鳥来るなり旦のめざめ　泰江
小鳥来る銃後の母は肺を病み　寿子
ぱらぱらと降る音聞こゆ椎拾ひ　裕子
秋の空母は硝子の目となりぬ　純子
天高しあんぐりと河馬まばらな歯　理和
独り居のやや内緒めく温め酒　藤穂
もう読まぬ本を束ねて秋に入る　喜久恵
投げ入れて向き様々の芒かな　茂登子
をさまらぬ怒りひらひら黒揚羽　綾子
新聞を開く無花果ひとつ食べ　尚子
橡の実を拾ひて栗鼠の土産とす　敏子
人差指葉月の闇がすつと抜け　恭子
木犀や町内どこも知りつくし　敦子
コスモスに胡蝶の恋のもつれこむ　実

調（つきのみや）　岸町公民館

宵闇や後の足音気にしつつ　慶子
台風一過どこの家にも灯がともる　敦子
大鼠一匹浮かぶ秋の昼　綾子
シルバーよ園児よソーラン運動会　寿子
とりどりに何処からともなく秋の蝶　泰江
燈下したし太宰治の殺し文句　弘子

あを吟行会　目黒林試の森公園

飯桐の房の実鴉は高笑ひ　純子
晩秋の鴉を意識して通る　美代子
脹脛ギュギュと枯葉の坂下る　恭子
呼び止めてタラヤウの実を指し示す　藤穂
道端の手押しポンプや石蕗の花　敏子
秋の池小声で訊ぬ野鳥の名　裕子
切株に躊躇ひ傷が槻落葉　喜孝
森の中ぽっと秋日の差す木の根　綾子

七座（ほくと）句会　中野区・小川苑

風落ちて水にひろごる九月かな　木枯
ひたむきと言ふは切なし秋海棠　綾子
遠き日の月を重ねてけふの月　尚子
言海のずしりと重し秋めきぬ　藤穂
蜻蛉追ふ猫の目猫の手猫の口　純子
秋の草寄せ植ゑにして美人果舗　須磨子
コスモスに溺れ善意にも溺れ　夏子
赤信号長しと思ふ残暑かな　多枝子
鰯雲海にひれ伏し待つサーファー　理和
ひとりごと言ふこともなしちちろ蟲　房代
遺言書書けば書いたで菊香る　恭子
鰯雲じつと待ちをる瓦屋根　東亜未

連句勉強会　毎月第2日曜
十二月　一月　休会
(090-9828-4244)

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

九月の句会

傳　中野区　カフェ傳

平仮名でさらにやさしく秋の草　茂登子
こぼれ落ちんこぼれ落ちんと蓮の露　恭　子
魂棚に呟きて燭ゆるがする　弘　子
指一本海に触れずに夏終る　寒　林
竿燈を支へて動くのどぼとけ　敦　子
裏返るかなぶん不運といふべかり　綾　子
落蝉の何で天向く七日かな　実
源氏読む一匹の蚊にまつはられ　藤　穂
秋湿り今日は夕日を見たりけり　美代子
売声もかすれアメ横秋暑し　寿　子
ありし日の母の針箱萩の風　喜久恵
ヤキトリ屋から出てきたやうな黒揚羽　喜　孝
海の家大事に解かれ新松子　理　和

調（つきのみや）　岸町公民館

東京に古墳いくつも曼珠沙華　藤　穂
遊美園てふ老人ホーム鶏頭咲く　泰　江
仏像の在すかに白彼岸花　慶　子
指入れて土の冷たし蝉の穴　敦　子
枝折戸の開いてゐたり実むらさき　綾　子
馬肥ゆる乗馬レッスン無料の日　寿　子
秋の蛇消えし辺りの水ゑくぼ　弘　子

七座（ほくと）句会　中野区・小川苑

風落ちて水にひろごる九月かな　木　枯
ひたむきと言ふは切なし秋海棠　綾　子
遠き日の月を重ねてけふの月　尚　子
言海のずしりと重し秋めきぬ　藤　穂
蜻蛉追ふ猫の目猫の手猫の口　純　子
秋の草寄せ植ゑにして美人果舗　須磨子
コスモスに溺れ善意にも溺れ　夏　子
赤信号長しと思ふ残暑かな　多枝子
鰯雲海にひれ伏し待つサーファー　理　和
ひとりごと言ふこともなしちちろ蟲　房　代
遺言書書けば書いたで菊香る　恭　子
鰯雲じつと待ちをる瓦屋根　東亜未
白繭を抱きてもどる秋の家　喜　孝

あとがき

ミスを懲りずにあまたするが先月は句会報の看板（月数）だけ書き換え中味は同じであった。呆れずに来る年もよろしくお願いします。（一部訂正済みを配本しました）

御芳志多謝

金井　充　様

二〇〇九年十二月号

発行日　十二月三日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
印刷・製本・レイアウト　佐藤喜孝
カット／恩田秋夫・松村美智子　竹僊房
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。